

「下 ちがいをかんがえてよもう」「どぶつぶつの赤ちゃん」

国語と情報教育研究プロジェクト

1 この教材を選んだ理由

本教材は、入門期教材として一年生が出会う説明文としては三つ目の教材である。

第一教材「いろいろなくちばし」では、説明文の基本的な形である「問い 答え」という形を学ぶ。第二教材「じどう車くらべ」では、やはり「問い 答え」という形について学んだ後に、自分で調べた自動車について「問い(どんな仕事をするか・どんなつくりをしているか)」「受け答え」の形で文章を書く活動が行われる。

「じどう車くらべ」では、説明文の基本的な形について学ばせること以外にも、文章を読むうえで大切な認識を子どもにもたせることができる。それは、教材文が一つの問いに対していくつかの事例を並列的に示して「答え」を用意しているという点である。また、「くらべてよもう」と単元名にあるように、複数のものを並べて「くらべる」というにも子どもを意識を向けられることが多くなっている。今回取り上げた「どぶつぶつの赤ちゃん」では、読み取った情報を比べる際に「ちがい」について考えさせることができる。これは、読み取った情報をただ並べて比べるという段階(「どぶつぶつ車くらべ」での指導)から、一歩進めて、

比べるときに両者の相違点について意識させていくというものである。情報の扱い方という点で、学習の深まりを期待できると考えた。

2 学習のねらい

・文中に書かれている事柄を書かれている順序に従って読み取り、比べる。

学習指導要領には、「時間的な順序、事柄の順序などを考えながら内容の大体を読むこと」「(イ)とある。これを受け、今回の指導では「問い 答え」という説明文の基本的な形を確かめながら、教材文に書かれている順序に従って内容を読み進めていくことを主な活動とした。また、これと合わせて、情報の扱いという観点から「読み取ったことを比べて考えること」「を深めさせたいと考えた。

前述したとおり、「比べる」と「は」「じどう車くらべ」の学習においても「自動車の種類による動きや構造」を並べることで体験させることができるが、「こ」では、読み取った内容のある視点(単元名にもある「ちがい」)から見直すといった活動の中で行わせることとした。

3 単元指導計画(総時数9時間)

次(時)	学習活動
一(1・2)	<ul style="list-style-type: none"> 教材文「どぶつぶつの赤ちゃん」を読み、学習の見通しをもつ。 新しく学習する言葉について知り、いっしょに読み進める。 問題「」について確かめる。
二(3～6)	<ul style="list-style-type: none"> 質問に対する答えをまとめる。 学習シートにそれぞれの赤ちゃんの様子をまとめる。
三(7)	<ul style="list-style-type: none"> いくつかの視点から読み取った情報を見直す。 読み取りで使用した学習シートの情報を見直す。
四(8・9)	<ul style="list-style-type: none"> 「じどう車くらべ」を読み、与えられた視点から情報をまとめる。 二種類の自動車の違いを比べてまとめてみる。

4 主な活動の流れ

「第一次(第1・2時)」
 「どぶつぶつの赤ちゃん」の「問い」になっている文を抜き出すとともに、「この問いに対応する答えを見つけながら読み進めること」を確かめた。

「第二次(第3～6時)」
 教材文の内容を書かれている順序に従って全員で読み進め、学習シートにまとめた。その際、時間の経過を表す言葉に注目させることで、生育の過程を意識させるようにした。

教材文「どぶつぶつの赤ちゃん」は、「問い」に対する答えがとても分かりやすく配置されているために、子どもたちは「答え」を探す活動を抵抗なく行うことができた。指導では、「ライオン」「しまつま」それぞれの赤ちゃんの様子を読み進めながら、問いにある「生まれたばかりのときは、どんなようすをしているのでしょう。」「と」「の」「を」「分けて大きくなっていくのでしょう。」「と」「の」「を」「分けて読み進めた。

「第三次（第7時）」

第二次の終わりの時間に完成した学習シートを見ながら「この文章では「ライオン」「しまつま」のそれぞれの赤ちゃんについてどんなことが書いてあるのかというのを子どもたちと話した。子どもたちから出された意見をまとめるための五点になった。

赤ちゃんの大きさ

目や耳の様子

お母さんに似ているか

歩くことができるか

食べ物はどんな様子か

「これら五点を視点として「ライオン」「しまつま」それぞれの「赤ちゃん」を比べた情報を、教師が整理し直して提示



資料1 読み取った内容を比べて「ちがい」について考えた学習シート

した。「これらを見ながら、子どもたちには読み取った情報を比べて「考え」を書かせてみた。

「ここでは「考え」とはいつても一年生の段階であるため、ある点に注目して比べる「ことができればよい」と考えた。どのように書けばよいのか分からないことも予想されたため、「Aは だけ、Bは だ」という文型も用意し、書き始めて少し時間が経過した段階で、書きなさい子どもだけでなく、学級全体に提示することとした。これにより、資料1にあるような文をほぼ全員が書くことができた。

「第四次（第8・9時）」

「第二次」に行った活動が、他の文章を読み取ったときにも活用できることを知らせる意図から、「じどう車くらべ」を使った活動を行った。「じどう車くらべ」は既習教材であるため、内容の読み取りに不安はなく、また、比べるための視点も「じ」と「つくり」の二つに限定されている。そのため、子ども自身で比べる視点を設定しやすいたことが予想された。

「前の時間にしたこととを『じどう車くらべ』を読み直してやってみよう」と提案すると、子どもたちは、最初は何をしたらよいのか分からないような表情でいた。しかし、学習シートを配布して前時の「Aは だけ、Bは

り、子どもたちが「比べるための視点」だけに注意することができると考えたためである。

5 実践を終えて

国語科指導の中で「情報の扱い」を考えると、例えば「比べる」といったことの扱い一つにおいても、どのような段階を踏みながらどのような手だてで指導していくことがよいのか考えねばならないことは多い。

今回の指導では、入門期の子どもが出会う説明文教材を対象に、「同じ種類の情報を並べて比べる」と「じどう車くらべ」から、次の段階である「並べたことを『ちがい』に気をつけてみる」といったことができるようになることを目指して指導を行ってみた。その結果、読み取った情報を整理して提示したり、まとめるために必要な文型を与えたりすることにより、一年生にもこういった活動が可能であるということが分かった。

今後課題となるのは、国語科の指導事項と情報活用の実践力育成のために必要な指導内容との整合性をどのようにとりながら指導を行っていくかということである。これはとても大きな問題ではあるが、子どもたちを指導する立場にある者としては、「言葉」によって表される「情報」の扱いという点からも考えていきたいことである。



資料2 「じどう車くらべ」を使って比べる活動を

だ。「じ」という形で「じどう車」を比べることを告げると、「トニックとバスを比べようかな」とか、「乗用車とバスを比べよう」といった声があがり始めた。この時間に行った学習シートには比べる自動車をあらかじめ設定し、比べるときに使った言葉も入れておいた。「つくり」することにより